

マルクス主義の全精神、その全体系は、…

111 イネッサ・アルマンドへ

親愛な友よ！ 「祖国擁護」については、私たちのあいだに意見の相違があるのかわかるのか、私にはわかりません。あなたは、『マルクス記念』論集のなかの私の論文*と、いまの私の言明とのあいだに矛盾を見つけていますが、そのどちらも正確に引用していません。この指摘に答えることは私にはできません。『マルクス記念』論集が手もとにありません。そこでなにかを書いたかを一字一句おもしろくおこすことは、もちろん私にはできませんでした。当時言ったことといま言っていることとを正確に引用しなければ、あなたのそういう論証に答えることはできません。

一般的に言って、あなたはなんだかすこし一面的、形式主義的に論じているようにおもわれます。『共産党宣言』から一つの句（労働者は祖国をもたない）を引用して、それをまるで無条件に適用し、民族戦争を否定するところまで行こうとしています。

マルクス主義の全精神、その全体系は、おのこの命題を、(α) 歴史的にのみ、(β) 他の諸命題と関連させてのみ、(γ) 歴史の具体的経験と結びつけてのみ、考察することを要求しています。

祖国とは歴史的な概念です。民族的抑圧を打倒するためにたたかう時代、もっと正確に言えば時機における祖国と、民族運動がはるか過去のものとなった時機の祖国とは、別のものです。祖国と祖国擁護とについての命題を、「三つの型の国家」（自決についてのわれわれのテーゼの第六項**）にあらゆるばあい一律に適用することはできません。

『共産党宣言』には労働者は祖国をもたない、と述べてあります。

これは正しいことです。だが、そこで述べているのは、これだけではありません。そこにはまた、民族国家を形成するうえでのプロレタリアートの役割はいくぶん特殊なものであるとも、述べてあります。第一の命題（労働者は祖国をもたない）をとって、それと第二の命題（労働者は自身を民族的階級として構成するが、それはブルジョアジーとはちがった意味においてである）との関連をわすれるならば、それは大きな誤りでしょう。

では、この関連はどのような点にあるのでしょうか？ 私の考えでは、プロレタリアートは民主主義運動（ある時機の、ある具体的な情勢のもとでの）では、この運動を支持することを、（したがってまた、民族戦争で祖国を擁護することを）拒否できないという、まさにその点にあるのです。

マルクスとエンゲルスは、『共産党宣言』のなかで、労働者は祖国をもたない、と述べました。しかし、その同じマルクスが、たびたび民族戦争を呼びかけています。すなわち、マルクスは 1848 年に、エンゲルスは 1859 年にそうしています（エンゲルスの小冊子『ポーとライン』の末尾。そこではドイツ人の民族的感情がまっこうからあおりたてられており、ドイツ人に民族戦争を直接に呼びかけています）。エンゲルスは、1891 年に、当時さしせまっていたフランス（ブーランジェ）＋アレクサンドル三世の対ドイツ戦争の脅威を考慮して、「祖国擁護」を率直にみとめました***。

マルクスとエンゲルスは、きょう言うことと、あす言うこととがちがうわからず屋であったのでしょうか？ そうではありません。私の考えでは、民族戦争における「祖国擁護」

をみとめることは、マルクス主義に**完全に**一致しています。1891年にはドイツの**社会民主主義者**は、実際にプーランジェ+アレクサンドル三世との戦争で祖国を擁護すべきでした。これは**民族戦争**の独得な変種となったでしょう。

注) * 『マルクス主義と修正主義』(第15巻P14~23) ** 23 - 3(第22巻 P174~175)

*** 『ドイツにおける社会主義』

第35巻『111 イネッサ・アルマンドへ』 P262~263

1916年11月30日に執筆

ポイント

マルクス主義の全精神、その全体系は、おのこの命題を、(α) 歴史的にのみ、(β) 他の諸命題と関連させてのみ、(γ) 歴史の具体的経験と結びつけてのみ、考察することを要求しています。